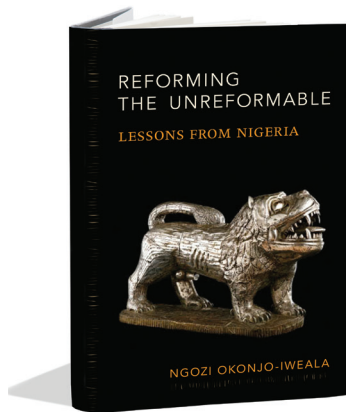


二つの顔をもつ 変革



ンゴジ・オコンジョ＝イウェアラ
(*Ngozi Okonjo-Iweala*)

改革不可能な国の改革 ～ナイジェリアから学ぶ教訓～ (*Reforming the Unreformable: Lessons from Nigeria*)

MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 2012,
202 pp., \$24.95 (cloth).

ンゴジ・オコンジョ＝イウェアラ氏の描く、経済不安や、社会基盤および制度上の荒廃、蔓延する貧困から立ち直り、安定を手に入れたナイジェリアの軌跡は類い稀である。経済および統治改革プロセスの最前線にいたナイジェリア人の彼女だからこそ、書くことのできた作品だ。

その記述は細部に亘り、十分に満足できる内容となっている。重要な経済的洞察が、理解しやすい言葉で述べられており、また2003～06年に財務大臣として率いた経済チームの直面した課題が、偽りなく描写されている。大統領を2期務めたオルセグン・オバサンジョ大統領(Olusegun Obasanjo)の任期中に実施されたマクロ経済改革の肯定的な成果だけではなく、曖昧な結果にも批評が加えられている。自身の強みと改革プロセスの過程で犯した過ちを明らかにしながら、著者はその経験を客観的に振り返り、オバサンジョ大統領の先見性を評価する。著者を陥れようと画策した人々、改革の妨害を試みた人々に対しても寛容である。

一般的には、豊富な石油資源が「災い」して、また軍国主義や、経済活動に対する国の関与、国および地方レベルでの政治的腐

敗を理由に、ナイジェリアは経済的低速から脱出することはできないと言われていた。しかし、著者は、このような見方は誤りであることを実証してみせた。2007年までにナイジェリアは、マクロ経済の安定とインフレの抑制に成功し、成長率を6～7%まで倍増させ、教育および医療制度の再編に着手したのだ。国レベルでの強いリーダーシップと、国民の福祉に対する懸念が組み合わさることで、経済を変革する強力な推進力と成り得ることを示したのである。

改革を目指す人々へ対するナイジェリアの経験から得られた教訓としては、経済チームが状況に応じて参照できる戦術書、効果的なコミュニケーション、市民社会や国民からの支持に基づく結果を重視した取り組みの必要性が挙げられている。著者は、国内指導者の政治的な意思が重要であると指摘する。その一方で、ナイジェリアの変革には、もう一つの側面が存在した。すなわち、国際社会からの戦略的支援とパートナーシップを必要としたのだ。

例えば、ブラジル人実業家アマウリ・ピア氏は、「一致団結し、困難な闘いに挑むことのできる、志を同じくする人々から成る経済チーム」を結成するよう著者に提言した。一方、英国のトニー・ブレア首相と世界銀行のジェームズ・ウォルフエンソン総裁(James Wolfensohn)は、マクロ経済改革計画が、将来的にナイジェリアが必要とする債務救済に関する協議への道を開くだろうと助言を与えている。

著者は、経済改革の戦略を策定するうえで、アフリカの歴史との関連性を重視する。石油がもたらしたナイジェリア経済の悪夢とその後の復活は、古くからの民族的そして文化・宗教的コミュニティ、植民地支配下での分割統治、1967～70年のナイジェリアーピアフラ戦争、その後25年間続いた軍政、そして農業および社会的崩壊と切り離して語ることはできない。著者はしかし、統治のあり方次第で、変化を起こすことは常に可能であると確信している。

改革の主だった成果としては、予算プロセスにおける漏洩の改善、予算の透明性を高める石油価格に連動する財政ルールの導入、2006年までに達成したマクロ経済の安定化、外貨準備高の引き上げ、インフレの

抑制とプライムレートの低下、そして成長率7%の達成が挙げられている。2003年にオバサンジョ政権は、民営化、規制緩和、自由化への取り組みを開始した。

最大の課題は、サービスの向上と年金制度の合理化を目指した公務員改革、そして貿易、関税、税関手続きの分野における汚職の根絶であった。教育レベルの低い公務員は、エリート層が国庫収入を地元への利益誘導に流用し地位の強化を図るのを黙認することで、乏しい給与を増やしていた。財務大臣であった著者が2006年に、突然外務大臣に任命されたのは、米の輸入に関わる収賄で得られた利益を、党の支持を育むために利用した政治家の行為を黙認することを拒んだためだと言われている。

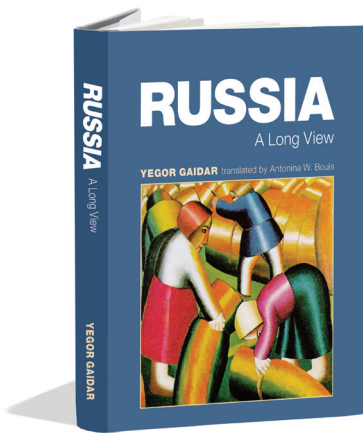
本書は、ナイジェリア研究家をその舞台裏へと導き、資源のずさんな管理、財務の流動性、農業の破綻、教育の崩壊、国民の貧困から幅広い層の政治家が利益を享受するアフリカ社会において、マクロ経済改革に取り組むことが如何に込み入ったことであるかを明らかにする。政治家の石油利権を断ち切り、ナイジェリアを安定した、多様な、市場主導の、社会的責任を持つ経済統治へと導くことがいかに困難であるかが描き出されている。

4年間に及ぶ世界銀行での勤務を経て、2011年にグッドラック・ジョナサン大統領の政権下で財務大臣に就任した著者は、ナイジェリアの成功がアフリカの変革に寄与するだろうとの見解を示し、またその日が訪れることへの期待を表わし、本書を締めくくっている。果たしてナイジェリアの改革は持続するか、改革は同国の持続的成長につながるか、その答えが是であるならば、ナイジェリアの経験は、他のアフリカ諸国のモデルとなることができるだろうか、と問いかけ、オコンジョ＝イウェアラ氏は国際社会からの支援と監視、同時に汚職の根絶に対するナイジェリアの継続的取り組み、マクロ経済枠組みの強化、金融部門における改革の推進の重要性へと立ち戻る。

「改革は持続するだろうか？」答はまだ出ていない。

ジョージタウン大学
人類学・政治外交教授
グウェンドリン・ミケル
(*Gwendolyn Mikell*)

鳥瞰図



エゴール・ガイダル
(Yegor Gaidar)

ロシア
～長期的視点～

(Russia: A Long View)

MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 2012,
525 pp., \$39.95 (cloth).

市場経済の形成につながる1990年代初めのロシア経済改革を構想する上で中心的役割を果たしたエゴール・ガイダル氏は、文筆家としても、学者としても優れていた。その資質は、本書を読めば明らかである。

2005年に出版されたロシア語の原書は、経済成長の本質に焦点が当てられており、ロシア経済の近代化の必要性に関する国内議論に大いに貢献した。英語版では、ロシア政治に関する詳細が一部省略され、著者の死去直前の2009年に執筆された短いエピローグが加えられている。そのため実際には、ロシアに関する記述は全体の3分の1にとどまる。

本書の冒頭では、新石器時代から、ローマおよびギリシャ時代の都市国家、定住農耕社会と遊牧社会、そしてヨーロッパにおける近代経済発展の起こりへと、世界史の概観がまとめられている。

経済の変化に関するマルクス主義思想について書かれた章や、内在する経済成長の決定要因とそれに伴う社会的適応について記述された興味深い章も含まれている。ソビ

エト連邦とロシアの経済史を扱った章は、深く掘り下げられており、バランス感覚もよい。

本書の最終部では、特に西側経済を中心とした、「ポスト工業化社会」の問題に的が絞られている。具体的には、人口の減少と高齢化、政府の規模、制度の根幹が揺るぎつつある社会保障制度、コストの高む国民年金制度、公教育の質、負担が拡大する一方の健康保険助成、政治腐敗、経済改革の政治学などが挙げられている。著者はこういった問題を分析し、ロシアが学ぶべき教訓を導き出す。

その分析結果は、やや概略的ではあるが(原書の副題は実際に「経済史概略」なのだ)、一般論である。しかし、導き出された結論は、巻末の豊富な注釈の数が示すように、広範に及ぶ、著者の並外れた読書量にしっかりと裏付けされている。著者は経済学者でありながら、経済分析の枠にとどまること

ロシアは西欧諸国から学ぶことができる。

なく、近代の計量経済学史的専門家よりも、むしろシュンペンター、マルクス、クズネツの思想への言及が多い。

その一方で、例えばロシアと一人当たりの国内総生産(GDP)の規模が似通った西洋諸国の過去数年間の比較を行うなど、統計的根拠も巧みに用いられている。統計にしろ、政治思想、もしくは歴史的論争を取り上げるにしても、その記述は、元ジャーナリストの経歴に相応しく、常に明快で才気煥発である。

本書の結論をごく簡単に述べるなら、著者は、技術が社会と政治の関係を決定づけるというマルクスの考え方に従い、国が発展するに伴い、制度は変化すると考えている。(ロシアは西欧諸国から学ぶことができるという国内では不人気な考え方に対して、マルクス主義の権威によるお墨付きを与える目的で、ガイダル氏はこの点を強調したのだろう。)エリート層が集団から余剰を引き出し、それを消費にまわすまで、または戦争が

収束し、投資から得られた利益を守ることができるようになるまで、伝統的な農業社会はそれほど発展してこなかった。近代の経済成長はヨーロッパにおいて、都市国家商人、地理的発見、金融システムの萌芽、そしてより強固な財産権とともに始まった。文化的要因は、経済の発展において重要である。例を挙げれば、家族の絆を重視する文化では、距離を置いた取引関係の構築が遅れ、縁故資本主義へとつながる可能性がある。

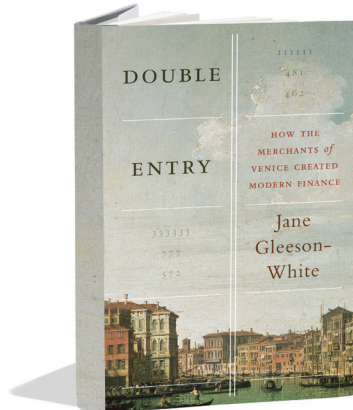
ソビエト経済が崩壊した原因は、イノベーションと国際競争の奨励を怠り、農業を軽視し、非効率的な経済を穴埋めするために石油とガスの輸出に依存したことにある。そして1980年代の石油価格の下落が、引き金となったのだ。1991年のソビエト連邦崩壊と1992年に始まった経済改革の後にロシアが経験した転換不況は、特定の改革によって引き起こされたのではなく、不可避なものであったと著者は主張する。

本書で導き出されたロシアへの教訓は、人口の自然減を補うための移民の受け入れ、定年の引き上げ、個人年金の奨励などである。著者は、政府の規模を拡大する余地は、ほとんど存在しないと考えている。国家は、基礎的な健康保険に対してのみ助成を行い、それを超える部分は民間保険の対象とすべきであり、教育と健康保険分野において市場メカニズムが機能するよう奨励すべきだとしている。ロシアは、既得権益が改革への障害となり汚職が蔓延する現行の管理された民主主義制度から脱却し、改革を促進する参加型の民主主義へと変革を遂げねばならない。

本書の提言は概して、政府と市場それぞれの役割に関する保守的な考え方が反映されているが、著者は、自身の能力と幅広い知識を用いてその根拠を示している。

国際通貨基金(IMF)欧州第II局
元局長
ジョン・オドリング＝スmeer
(John Odling-Smee)

借方と貸方



ジェーン・グリーソン＝ホワイト
(Jane Gleeson-White)

複式簿記

～ベニスの商人が生み出した近代会計～

(Double Entry: How the Merchants of Venice Created Modern Finance)

W. W. Norton & Company, New York, 2012, 304 pp., \$26.95 (cloth).

ジェーン・グリーソン＝ホワイト氏の著作は、驚くほど読みやすく、複式簿記の誕生とその発展を色鮮やかに描き出す。本書は、近代会計の起源を詳らかにした後、複式簿記こそがルネッサンスの興りと繁栄をもたらした、資本主義の発展に貢献し、ケインズによって理論が打ち立てられた国家経済計算体系の重要な先駆けとなったという仮説を立て、より思弁的な方向へ進んで行く。こういった歴史的可能性のみならず、複式簿記は今日、21世紀の「地球の運命を左右する」力をも持つという。

本書の前半は、複式簿記の祖と呼ばれるルカ・パチオーリ(Luca Pacioli 1445-1517)の人生と経歴を説明した興味深い物語となっている。パチオーリの聡明な頭脳は、数学者、当時は数学との境界が曖昧であった魔術師、そしてフランシスコ修道会の修道士として遺憾なく発揮された。グーテンベルグにより発明された活版印刷術を活用し、パチオーリは何冊かの文献を出版したが、その中には、パチオーリの最大の遺産となる、ベネチア式複式簿記の利点を推奨する論文が収められたルネッサンス時代初の数学大全が含まれる。

パチオーリはそれまでの慣習を破り、複式簿記に関する論文を、ラテン語ではなく、

口語であったイタリア語で執筆した。そのため、多くの人の目に触れるところとなり、複式簿記の普及が加速した。パチオーリは、イタリアにおけるローマ数字からインドアラビア数字への緩やかな転換にも一役買ったといえる。

一気に時代を数世紀下れば、複式簿記の遺産は明白である。株式会社の財務諸表は、「商売が順調か否か」を把握するというパチオーリの意図が反映されている。会計基準や会計原則もまた確かに、複式簿記が土台となり形成されてきた。後半の章では残念なことに、複式簿記がもたらした衝撃と影響がセンセーショナルに(少なくとも誇張されて)書かれがちである。ハリケーンの原因を辿れば、蝶の羽ばたきに遡ると一般的に説明されるバタフライ効果のように、昨今の会計データに基づく判断の不完全性の背景には複式簿記が存在するという。フォード・ピント事件(フォード社は1977年、会計主導の費用効果分析に基づき、サブコンパクト車「ピント」の安全装置を改善しないという結論に至った)でさえ、複式簿記が厳格な国際会計へと変質したこと、そして無慈悲な判断を下すよう結論を導くことのできる文化を創り出したことが原因であるとされている。会計はしかし、疑いなく、人間の条件である欲と無慈悲のひとつの道具なのである。

やや衝撃的なことに、本書はさらに全くはばかることなく、社会現象としての会計の本質に関する意見の分かれる議論へと突き進んでいく。7章「複式簿記と資本主義～鶏が先か卵が先か?」では、読者に対し、複式簿記が資本主義の繁栄をもたらしたのか、もしくはその逆か、というテーマに関する客観的議論への準備を促す。しかしながら、数段落ほど読み進めれば、著者がいずれの立場に共感しているかは明らかである。複式簿記は、我々が資本主義と呼ぶ新たな社会および経済制度の発展を導いた強力なツールであると結論付けた、ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルトの1924年の論文について、「バランスがとれている」と著者は評価する。その一方で、南アフリカの経済学者バジル・ヤーメイの反対意見については、僅かに言及されるだけである。参考文献や引用に関しても同様に、会計は社会組織や関連する圧力の結果生じたものであるというより従来の考え方に対し、均衡を欠いている。

バランスシートと発生会計主義に慣れた

会計士を中心に、国民経済計算体系の誕生は、複式簿記によるところが大きいという意見については、眉をひそめる向きが多いだろう。総生産高は消費と投資の合計によって決まるというケインズの『一般理論』は本来、経済活動に関する資産・負債・収益・費用・資本が記録され、分類され、簡潔にまとめられてきた帳簿によってではなく(借方と貸方の合計額を一致させることによるのではなく)、むしろ定義によって均衡が保たれるべき方程式である。

粗探しはここまでとして、本書は、会計の

会計はしかし、 疑いなく、 人間の条件である欲と 無慈悲のひとつの 道具なのである。

仕事に携わる人々にとってはもちろんのこと、そうでない人々にとっても同様に適切な読み物に出来上がっている。物語は小気味よいテンポで進み、人物描写は、細部と概観の使い分けが巧みである。埋まっている魅力的な金の塊を掘り起こせば、ルカ・パチオーリが息を吹き返すようである。例えば、1509年の終わりにライフスタイルに対する懸念を理由に、修道士たちが教皇の恩寵と修道会での管理上の職務をパチオーリから取り上げるべきであると求めた時の、パチオーリの裏工作については、想像力を膨らますばかりである。僅か数か月の時を経て、パチオーリは修道院の長に任命されているのである!

会計はどのように「地球の運命を左右」するのか?著者によれば、資産価値の測定(そして測定しないこと)が、いかにグローバル経済を形成するかという点をより深く理解することに答えがあるという。価値ある試みであり、ほぼ間違いなくパチオーリが喜んで引き受けるだろう挑戦である。

国際通貨基金(IMF)財務局
副局長
クリストファー・ヒーマス
(Christopher Hemus)